

# 大学の野外教育におけるキャンプ場の施設設備の 現状と地域連携のあり方について

Regarding the current state of campsite facilities and equipment for outdoor education in university  
and the state of regional cooperation

井川純一<sup>1</sup>, 伊佐野龍司<sup>1</sup>, 安住文子<sup>2</sup>, 重城 哲<sup>2</sup>  
Junichi Igawa<sup>1</sup>, Ryoji Isano<sup>1</sup>, Ayako Azumi<sup>2</sup>, and Akira Jujo<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 日本大学文理学部 / College of Humanities and Sciences, Nihon University

<sup>2</sup> 日本大学理工学部 / College of Science and Technology, Nihon University

## 1. 緒言

野外教育は、自然体験活動を教育手段として用いており、青少年の健全育成にとって極めて有効であると報告（文部省、1996）されていることから、その教育効果は社会的にも認められているといえよう。また、近年の社会的課題（不登校やひきこもり、ネット依存等）に対する解決手段の一つとしても用いられていることに加え、環境教育やインクルーシブ教育の推進、持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向けた大きな役割が期待されている（日本野外教育学会、2022）。

日本における野外教育の定義としては、文部省（1996）の報告によって「自然の中で組織的、計画的に、一定の教育目標を持って行われる自然体験活動の総称」とされている。また、近年では、土方・張本（2023）による「野外における直接体験を通じた学びを生起させる社会・文化・歴史的な営みで、自然を源泉とする。」と再定義されている。すなわち、野外教育の本質は直接体験であり、人と人、人と自然、人と社会が直接つながり、その関係性の中で様々な体験を通じて全人的成長を支えることが根幹にある（日本野外教育学会、2022）。

野外教育の効果や定義を踏まえた、大学における野外教育の実習カリキュラムであるキャンプでは、自然環境の中での共同生活や野外スポーツ活動（オリエンテーリング等）を通してキャンプに対する理解を深めることに加え、身体的、精神的、社会的育成を進展させ、自然環境の中で相互に協力しながら組織的に活動を実施し、自然に親しむ技能を深化させることを目標としている（日

本野外教育学会、2022）。そうした組織キャンプにおいては、キャンププログラムもさることながら、多様な体験の機会や場の中心となるキャンプ場の施設設備といった環境条件が受講学生のニーズや教育目的に即して、適正に整備されることにより、その教育効果向上を図るためにも重要であるといえよう。

このようなことから本研究の目的は、大学の野外教育におけるキャンプ場の施設設備に関する現状とその改善点を調査し、施設等を管理・運営する地域企業との連携のあり方を検討する基礎資料を得ることであった。

## 2. 方法

### 2.1. 調査対象者

A 大学 A 学部体育専門学科の 20XX 年度野外実習（キャンプ）受講学生 70 名（データ分析対象：欠損回答を除く 65 名）を対象とした。調査対象者は、アンケート調査の回答前に、データの取得および個人情報の取り扱いと回答の有無が授業の成績評価には一切関係がないことを説明した上で、同意が得られた者を対象とした。

### 2.2. 調査期間および場所

調査期間は、20XX 年 9 月 10 日～13 日（3 泊 4 日）であり、野外実習（キャンプ）が実施された場所は、山梨県北杜市の民営キャンプ場であった。

### 2.3. 調査方法および項目

調査方法は、Google フォームを活用した無記名式アンケートであった。調査項目は、同一キャンプ場を対象とした調査と比較検討を行うため、先行研究（朝倉ほか、1986；加藤・澤村、2011）を参考に作成した。調査項目の詳細は以下の通りである。

①過去のキャンプ経験（「経験なし」、「学校や団体」、「個

人)、「両方)。

②キャンプ施設設備に関する項目(「テント」、「バンガロー」、「炊事場」、「ゴミ収集場」、「トイレ」、「シャワー室」、「喫煙所」、「キャンプファイヤー場」、「管理棟の機能」、「施設配置、動植物等」、「河川、登山・ハイキング、オリエンテーリングコース」、「調理器具」)に関する50項目。各設問は「かなり不満(1点)」～「かなり満足(6点)」の6件法を用いた。

## 2.4. 統計処理

分析対象とした項目は、キャンプ場に関連する42項目であり、過去のキャンプ経験について「個人」でのキャンプ経験の有無により、調査対象者を「経験者群(n=24)」と「初心者群(n=41)」に分類した。統計処理は、SPSS Statistics ver.27 (IBM)を用いて各項目の平均値を算出し、過去のキャンプ経験の差を独立したサンプルのt検定を用いて分析を行った(有意水準は5%とした)。

## 3. 結果

アンケート調査の結果、得られた全データの経験者群と初心者群の平均値を図1に示した。

全体の中から高評価だった上位6項目は、河川を中心とする周囲の自然環境、テントサイトの清潔さおよび快適さ、キャンプファイヤー場の利用性であった(図2)。

その一方で、全体の中から低評価だった下位6項目は、シャワー施設設備(広さ、数量、清潔さ、料金)、バンガローおよび炊事場の快適性であった(図3)。

これらの項目は、過去に同じキャンプ場でのアンケート調査を実施している、加藤・澤村(2011)と同様の結果であることが伺える。その中で、加藤・澤村(2011)から平均値の上昇がみられた項目は、トイレ(広さ、清潔さ、数量)であった。

調査対象者における過去のキャンプ経験の差を比較した結果、全体的に経験者群の平均値が高い傾向であった。その中でも、テントとテントの間隔(設置場所の広さ)、トイレ設備の広さや清潔さについては、初心者群よりも経験者群の評価が有意に高いことが明らかになった(図2および図4)。

## 4. 考察

調査項目のうち高評価(自然環境、テントサイト)および低評価(シャワー、バンガロースペース)の項目では、加藤・澤村(2011)と同様の傾向がみられた。キャンプ場の所在地である北杜市は、南アルプス・甲斐駒ヶ

岳を源とする清流が流れており、日本名水百選に選定された名水であることから、豊かな自然環境の中で様々な教育プログラムによる体験を通して得られる教育効果(中川ほか、2005;日本野外教育学会、2022;松本ほか、2009)が期待できる。加藤・澤村(2011)の調査から12年が経過しているが、豊かな自然環境が維持されていることに加え、テントサイトが高評価だったことから、野外教育の実習地を選定する上で重要な条件として設定できるであろう。先行研究から継続して高評価だった項目がある中で、加藤・澤村(2011)において著しく低評価であったトイレ(広さ、清潔さ、数量)の項目は、本調査での平均値が中位以上に向上していたことから、キャンプ場内のトイレ施設設備環境が向上していることが伺える。

トイレ関連の項目が向上した一方で、シャワー施設設備に関する全項目の満足度が依然として低いことも確認された。シャワー施設は、コイン式(100円)で数分間使用することが可能な設備である。本実習では隣接の公共温浴施設を利用することが可能であることから、シャワー施設を利用していない学生も存在したが、キャンププログラムの進行状況によっては、公共温浴施設が利用困難な場合もあり、実習を運営する側としては衛生面等を担保するためにも、シャワー施設設備改善の要望は必要と考える。また、学生が多く時間滞在する施設であるバンガローの快適性に関する満足度が依然として低いことも挙げられた。夜間就寝時は、バンガローに加えて、テントを併用した二組に分かれるため、バンガローの定員を下回る人数配置となるものの、バンガローの広さに対して低評価であった。加藤・澤村(2011)から継続して低評価の項目であったバンガローであるが、運用面での柔軟な工夫(利用者の体格、荷物量を考慮した人数配置の見直し等)も大学側としての今後の検討課題と挙げられるであろう。

また、過去のキャンプ経験の差(経験者群と初心者群)を比較した結果、テントとテントの間隔(設置場所の広さ)、トイレ施設設備の広さや清潔さについては、初心者群よりも経験者群の評価が有意に高いことが明らかになった。これらのことから、個人でのキャンプ経験を有する者は、初心者群よりも他のキャンプ場を利用する機会が多いと考えられ、有意差が認められた項目(テントとテントの間隔(設置場所の広さ)、トイレ施設設備の広さや清潔さ)については過去に経験してきたキャンプ場よりも充実していた点であるといえる。

2014年度からキャンプ場を管理・運営する現指定管理者は、地域に精通するスタッフを揃えた民間企業である。

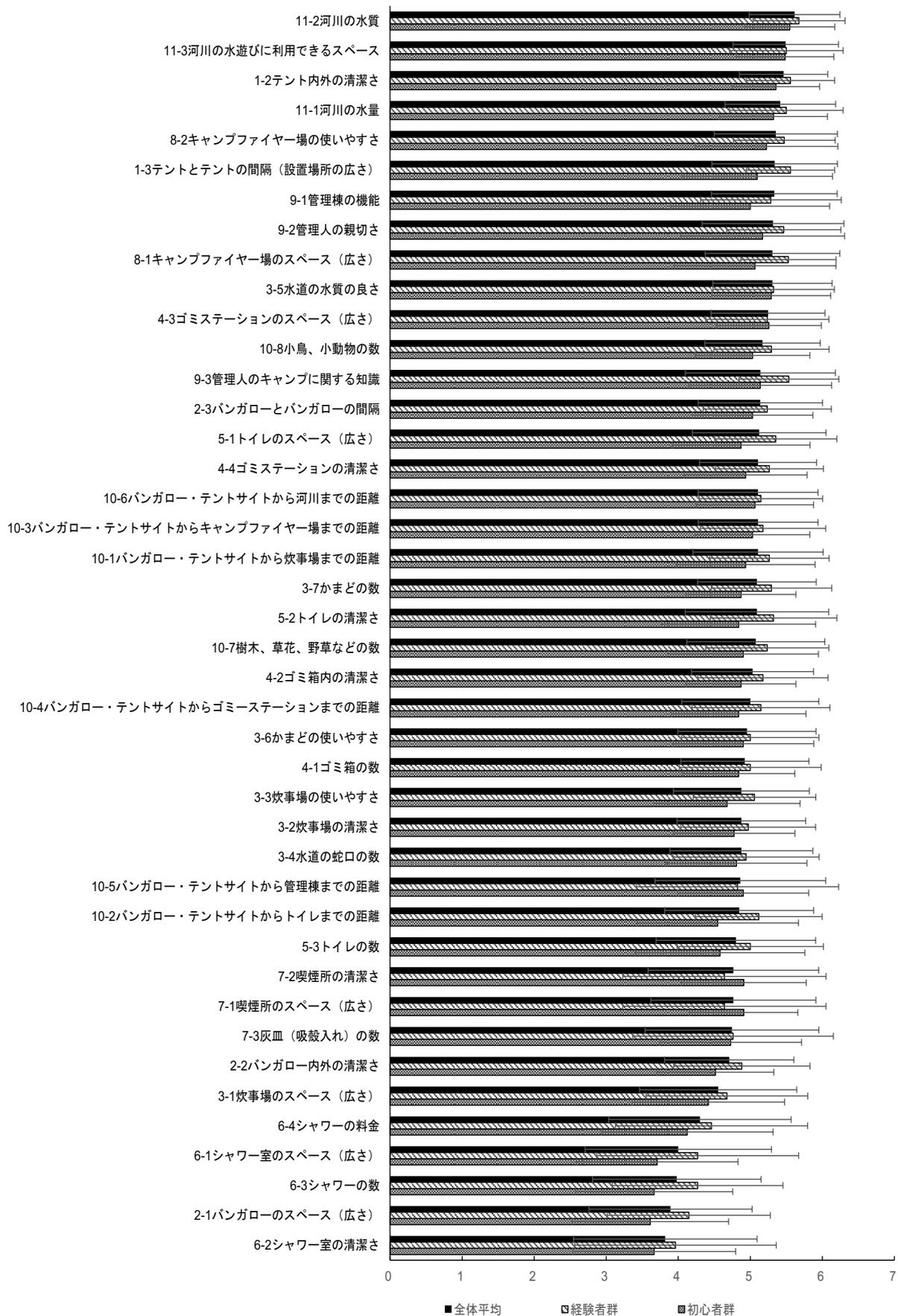


図 1 全データおよび経験者群と初心者群の平均値

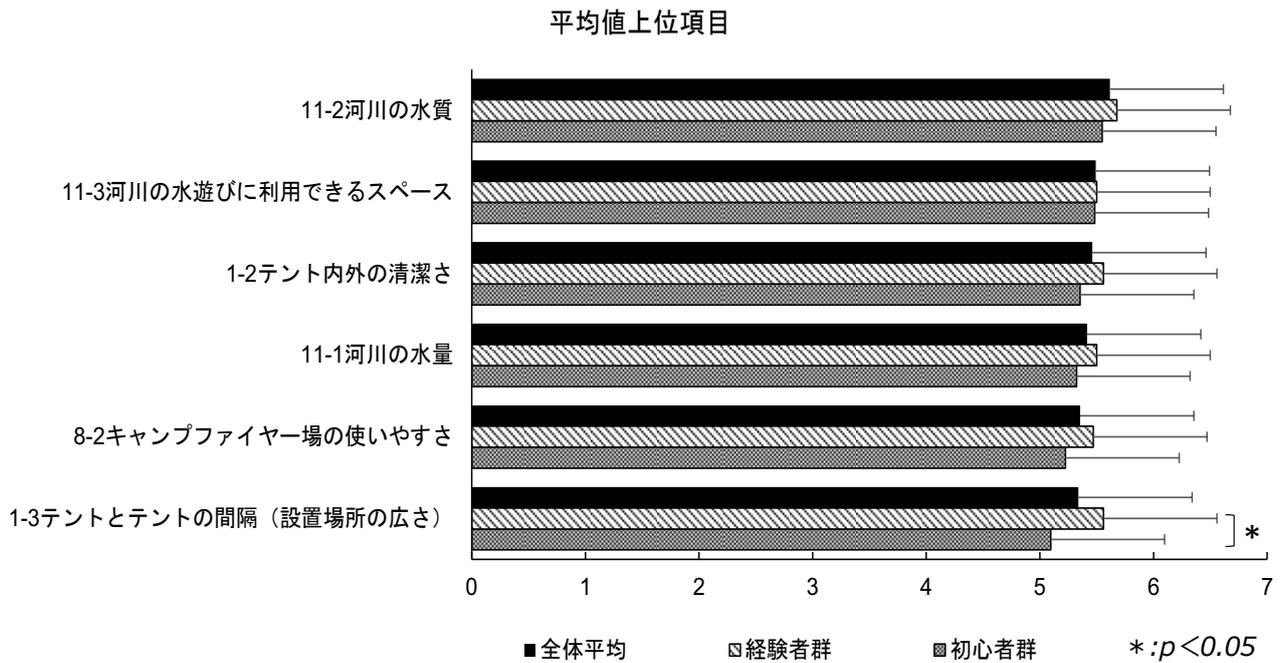


図2 アンケート調査の上位6項目

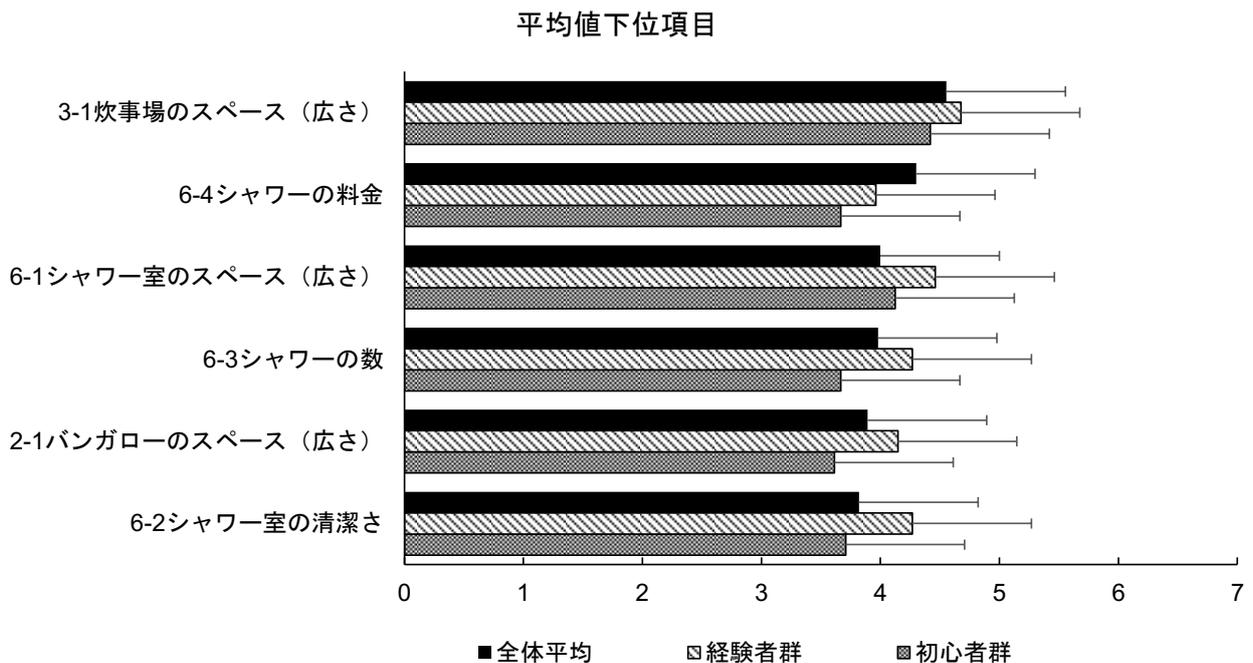


図3 アンケート調査の下位6項目

地域住民目線および利用者のニーズに合わせたサービスが高く評価されており、トイレ施設設備の改修や河川の汚濁防止もこの一つであると考えられる。本調査における、トイレ施設設備の評価上昇および河川を中心とした自然環境への高評価の結果は、民間企業のノウハウを生かしたきめ細かく、質の高い取り組みの成果と考えられる。キャンプ場における、安全・衛生面の確保は、管理者および利用者双方で連携して積極的に取り組むべき課題と考えられることから、管理者の企業努力を生かしながら、利用者の運用面で柔軟性を持たせた取り組みも

進めるべきであろう。

快適性および利便性の側面において、下位項目であった施設設備に関しては、より詳細（自由記述や指導者対象調査）な調査・分析を試みる必要があるといえる。これにより、大学教育（組織キャンプの目的、効果等）および地域・民間企業（管理コスト、利用実態等）の多様なニーズに対応した、サービス提供や運用面の工夫につながると考えられる。また、利用者目線での一方向的な受容や要望だけでなく、大学教育と地域の企業および行政が協働して相互に理解し合う「共創」を目指していく

トイレ施設設備の平均値

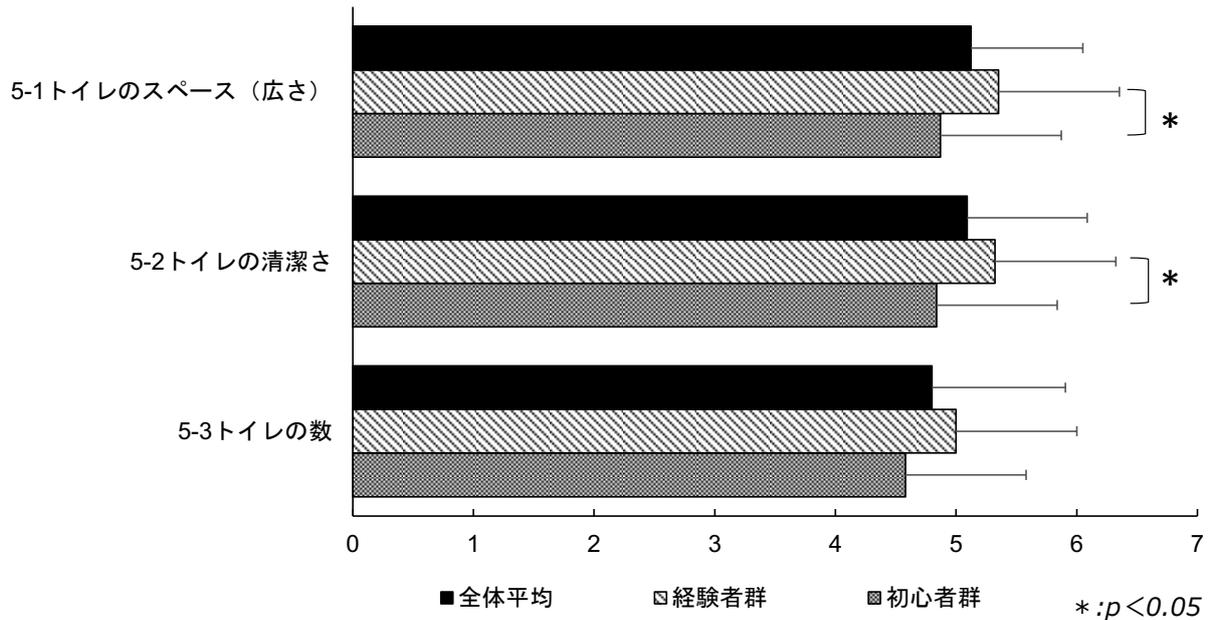


図4 トイレ施設設備の平均値および統計処理の結果

ことが重要な視点であり、教育機関と地域の「共生」の実現に向けた具体的な連携のあり方についての考察・提言の検討を進めていきたい。

## 5. まとめ

本研究の目的は、大学の野外教育におけるキャンプ場の施設設備に関する現状とその改善点を調査し、施設等を管理・運営する地域企業との連携のあり方を検討する基礎資料を得ることであった。A大学A学部体育専門学科の20XX年度野外実習(キャンプ)受講学生70名(データ分析対象:欠損回答を除く65名)を対象としたアンケート調査を実施した主な結果は以下の通りである。

- ① 全体の中から高評価だった上位6項目は、河川を中心とする周囲の自然環境、テントサイトの清潔さおよび快適さ、キャンプファイヤー場の利用性であった。
- ② 全体の中から低評価だった下位6項目は、シャワー施設設備(広さ、数量、清潔さ、料金)、バンガローおよび炊事場の快適性であった。
- ③ 過去のキャンプ経験の差を比較した結果、全体的に経験者群の平均値が高い傾向であった。その中でも、テントとテントの間隔(設置場所の広さ)、トイレ設備の広さや清潔さについては、初心者群よりも経験者群の評価が有意に高いことが明らかになった。

得られた結果のうち、①と②については、加藤・澤村(2011)と同様の結果であることが伺える。その中で、加藤・澤村(2011)から平均値の上昇がみられた項目は、

トイレ(広さ、清潔さ、数量)であった。本調査における、トイレ施設設備の評価上昇および河川を中心とした自然環境への高評価の結果は、民間企業のノウハウを生かしたきめ細かく、質の高い取り組みの成果と考えられる。③については、個人でのキャンプ経験を有する者は、初心者群よりも他のキャンプ場を利用する機会が多いと考えられ、「テントとテントの間隔(設置場所の広さ)、トイレ施設設備の広さや清潔さ」については過去に経験してきたキャンプ場よりも充実していた点であるといえる。キャンプ場における、安全・衛生面の確保は、管理者および利用者双方で連携して積極的に取り組むべき課題と考えられることから、管理者の企業努力を生かしながら、利用者の運用面で柔軟性を持たせた取り組みも進めるべきであろう。大学教育(組織キャンプの目的、効果等)および地域・民間企業(管理コスト、利用実態等)の多様なニーズに対応したサービス提供や運用面の工夫についても、利用者目線での一方向的な受容や要望だけでなく、大学教育と地域の企業および行政が協働して相互に理解し合う「共創」を目指していくことが重要な視点であり、教育機関と地域の「共生」の実現に向けた具体的な連携のあり方についての考察・提言の検討を進めていきたい。

## 利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

## 参考文献

- 朝倉徳雄・永嶋正俊・澤村 博・川井 昂・吉本俊明・菊地君男・岩田 惇（1986）キャンプ場の利用状況と施設の評価について—白州町営尾白の森キャンプ場の場合—. レクリエーション研究, 16:136-141.
- 土方 圭・張本文昭（2023）体験概念の整理に基づく野外教育の再定義. 日本野外教育研究, 26 : 45-54.
- 加藤幸真・澤村 博（2011）キャンプ場の施設評価に関する研究～山梨県の市営キャンプ場を例として～. キャンプ研究, 14(2):37-42.
- 松本晶子・釜本健司・早石周平（2009）大学生の環境教育における自然体験活動の意義. 沖縄大学人文学部紀要, 11:43-52.
- 文部省（1996）青少年の野外教育の充実について（報告）. 青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議.
- 中川もも・岡村泰斗・黒沢 毅・荒木恵理・米山絵理（2005）長期・短期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす効果. 野外教育研究, 8(2):31-43.
- 日本野外教育学会（2022）野外教育を通じて子供の育ちを支える～すべての子供が豊かな自然体験を享受できる社会を目指して～. 政策提言, 1-18.